

ふるさとと自尊感情と

船穂小学校の前に勤務した小学校は町内1小学校、1中学校で、成人式には毎年出席していた。その中で、成人者代表として一人の若者があいさつをした。

「わたしは、幼いころから町の人に支えてもらって成人した。近所であいさつをしてくれた人、見守り隊のおじいさん、あばあさん、そして友だち。みんなのおかげで今の自分がある。高校を卒業して東京の大学に通ううちにその思いが自分の中でどんどんふくらんでいった。わたしは、大学を卒業したらこの町に帰ってこようと思う。そして、自分を支えてくれた人たちのために働きたいと思う。」新成人らしいはつらつとした態度で、弾むような若々しい声で彼は言った。

自分の20歳のころとくらべると恥ずかしくて消え入りたくなるような立派さだと思った。式場は水をうったように静まり、彼の思いに胸が熱くなった。20歳の若さにして彼は自分の根をしっかりと見据え、感謝の気持ちを自分の決意にかえて言い切った。

船穂小学校の教育目標「ふるさとを愛し 心豊かに たくましく生きる子ども」とは、彼のような人であり生き方ではないかと思う。「ふるさとを愛し」とは、自分という存在の拠るべき場所を知っているということではないかと思う。

20年近く前のことになるが、ゆずで有名な高知県馬路村の小学校に視察に行った。校長先生は、「馬路村の小学校と中学校の教育の目標は、『生きぬく力』を育てることです。都会に出ても、ふるさと馬路村を誇りに思い、都会で生きぬく力を育てることです。」と熱く語った。また、「飲料水で馬路村は有名になったけれども、あの飲料水は高知や高松のデパートにゆず果汁のびんづめを販売に行った農協の職員が作り出したものです。デパートでゆず果汁が誰にも相手にされず、何とか売れる方法はないかと考え抜いて作り出したものです。」とも言われた。ひとりの農協職員の努力が、ゆずの販路を開拓し、村の名を全国に知らせた。村の特産品であるゆずを何としても販売したという彼の思いは、職に対する使命を越えていると思った。あの飲料水は彼の馬路村に対する強烈な誇りや愛着によって生まれたのだと思う。馬路村小・中学校の『生きぬく力』を育てる教育が彼の思いを育んだようにも思える。

子どもたちは、低学年の生活科や3年生の社会科で学区や倉敷市の学習をし、学年が進むにつれて、その対象は、岡山県、全国へと広がっていく。生活範囲も、成人すれば大きく広がり、都会に出て生活する子もいるだろう。世界の国々と関わりながら働く子もいるだろう。その時に、自分と言う存在に対して強い誇りをもってこそ、他者への敬意や理解、目を世界に向ければ外国の異文化への敬意や理解が生まれるのではないか。

これらのことを「ふるさとを愛し 心豊かに たくましく生きる」と言っているとわたしはとらえたい。